

現場の声

平成 23 年 3 月 11 日に地震が発生し、津波が襲来、全交流電源が喪失して以降、現場作業員は、厳しく困難な現場での対応が続いた。

今回の事故対応にあたった事実関係の調査の中で、聞き取り等を通して、現場作業の厳しさ・困難さが明らかになった。以下に、当時の状況に関する現場の声を掲載する。

なお、これらは聞き取り等により得られた本人の記憶による生の声であり、事実でないことも含まれている可能性があるが、事故対応の状況を理解するの一助として、敢えて掲載したものである。

【中央制御室の状況と、現場確認時の状況】

- 津波が来た時刻に 1,2 号の電源盤のランプがフリッカ（注：点滅）し、一斉に消えていくのを目前で見た。D/G が止まりバタバタとランプが消えていく状況だったが、何が起きたのか分からなかった。中操（注：中央制御室）の照明は、2 号機側はまっくら、1 号機側は非常用灯（薄暗いわずかな照明）に切り替わった。警報が全て消えて一瞬シーンとなった。2 号側が先だったような気がする。目の前で起こっていることが、ほんとうに現実なのかと思った。
- いつ頃か時間的には記憶に無いが、中操に**運転員が「ヤバイ、海水が流れ込んできている」と大声で叫びながら戻ってきた**ので、津波で海水が流入してきていると思った。
- RPS（注：原子炉保護系）の MG セット（注：電動機・発電機セット）復旧で現場に行った補機操作員から後で聞いた話。1 号は起動できないのですぐに帰ってきた。2 号は起動して**地下から聞いたことのない轟音がしてきたのであわてて階段を上がった**。S/B（注：サービス建屋）入り口から水が入ってきていた。水をかぶりながら引き上げてきた。
- 廊下（注：タービン建屋地下階の廊下）の中間くらいを歩いたら近くの火報が作動し、危険を察知し戻ろうとした。そしたら**急に電気が消えると同時に D/G が止まる音がした**。訳も分からず走り、M/C 室を通り階段を上る寸前に**D/G 室の気密扉より大量の水が流れ込んできた**。
- なぜか閉まるはずのない 1-2 号機の連絡扉が閉まっていて一人では開けられなく、二人で押して開いた。**開いたと同時に大量に水が流れてきて腰まで浸かりながら歩いていき、その時に初めて津波が着たと思った**。S/B（注：サービス建屋）1 階は 80cm くらい水があり、近くにあるものが色々流れていた。その後ビショビショのまま、中央操作室に戻り概要を話した。
- 恐怖心というよりも電源を失って何も出来なくなったと思った。若い運転員は不安

そうだった。「操作もできず、手も足も出ないのに我々がここにいる意味があるのか、なぜここにいるのか」と紛糾した。(最後はどう収めたのですかの問いに対して)自分が「ここに残ってくれ」と頭を下げた。続いて別の当直長も無言で頭を下げてくれた。「若い研修生 2 人は免震棟に避難してくれ、皆それでいいな」と話をし、2 人を退避させた。

- 手も足も出なかった時、何も出来ないから**非常用の乾パンと水を取ってきて食べる**と指示し、少しでも落ち着かせようとした。
- 一部の人からここに残ってどうなるんですかという意見があり、他の人も口には出さないが同じような思いだったと思う。**気分が悪くなって横になった人もいて、その人は今も(注：聞き取り時点) 出社できない状況。**
- パラメータが見えてくる前は、**五感を失っている状況**だった。
- 訓練を色々行っていたが、それを活かせる状況ではなく、**手足を奪われたような状態の中、見えるデータを見ていた**といった状況だった。水素爆発のあたりから、**個人差もあるが落ち着かなくなる者もいた。**
- 中操内では、**被ばく線量を下げよう、当直員を 1 号側から 2 号側に寄らせてしゃがませた。**11 日の夜から明け方にかけて。**主任級でも目を見て不安がわかった。**
- **爆発後、メンバーが体調不良で 3 人くらい横になって起きられないような状況**だった。
- **情報がなく、プラントの状態も見えない中で、何かをしていないとおかしくなりそうだったので、次の作業を探して現場で作業をしていた。**情報がなかったから、作業が出来たのだと思う。
- 大物搬入口から水が入って来ているのを発見、のぞき込むとシャッターの下から水がしみ込んできた。その直後**シャッターが吹き飛び建屋内に津波が入って来た。2 人で走って離れたが恐怖で震えが止まらなかった。**
- 4B D/G の運転状況の(確認の)ため、共用建屋に入ろうとしたが**入り口ゲートに閉じ込められてしまった。**警備員に連絡したがつながらず、**2~3 分後に津波が襲ってきた。**水が下から侵入し、もう死ぬのかと思っていたところ、同じ状況にあった先輩社員のゲートのガラスが割れ、脱出でき、自分のガラスを割ってくれたおかげで脱出することが出来た。**その時にはあご下まで水が来ており、本当に怖かった。**
- 新 S/B (注：サービス建屋)の中を確認するために、建屋の中に入って窓から海を見たら、**遠くに水しぶきが上がっていた。**やばいかなと思って**2,3 階に行かないで扉を開けて声だけかけた。**危ないかなと思って**新 S/B (注：サービス建屋)から出てきて、左側見たときには津波が 4 号機の方から来ていた。**それで 4 号前に放水口か取水口の点検口の鉄板、**でかいやつ、水柱 10 何メートルが上がったので足が竦んでしまって動きが止まってしまった。**新 S/B (注：サービス建屋)から S/B (注：サービス建屋。中央制御室に入るための建屋。新 S/B より 4 号機側にある。)に行

- かなければいけないので、津波に向かって走っていった。本当に危なかった。津波のほうに走っていかないと中操に行けないので。
- 現場に行く際に、指輪などが汚染して持ち出せなくなるかと思い、一度は外したが、**最悪の事態が起きたときに自分だと分かるように、また、お守りとして身に付けて現場に向かった。**
 - **中操、現場とも真っ暗で、家族の安否、外部の様子も分からず（ニュースが見れない）不安でいっぱいだった。**
 - 電源が無くて PHS、ページングとかが使えない中で、負荷をケーブルボルト室で落とす際に、連絡手段として人を中操からケーブルボルト室まで何人か配置してやりとりした。中操入口、食堂、現場控え室、ケーブルボルト室でだいたい5人ぐらい配置した。**多い時はタービン建屋を一人50mぐらい何回も往復した。**
 - 1号機爆発により3・4号中操の線量が急上昇。当初1号機の発電機内の水素が爆発したものと認識しており、なぜ屋外の線量が上がるのが良く分からなかった。**通信手段が当直長席のホットラインのみで、中操外の状況や情報がほとんど分からず、とても不安だった。**
 - 3号機がいつ爆発するか分からない状態であったが、次に交替で（中操に）行かなければならなかった。**本当に死を覚悟したため、郷里の親父に「俺にもしもの事が起きたら、かみさん、娘をよろしく」と伝えた。**
 - S/C スプレイ弁の開閉、炉注入弁の開閉、D/W スプレイ弁の開操作を実施したが、暗闇の中、足場が無い場所で操作する恐怖以上に、**近くで SRV の動作音と振動を体感した時、「この蒸気が漏れたら自分は死ぬのだろうな」と思いながら操作した。**
 - 中操に戻ると真っ暗で、HPCI、RCIC のランプと DC 電源のランプしかついていない。**現実味がなかった。本当に起きている事なのか？実感がわかなかった。**
 - 中操で3秒に0.01mSv（ずつ）上がり始めて、（中操から）なかなか出れない時は、**もうこれで終わりなんだと思った。**
 - 汚染覚悟で保管されていた非常食の乾パンを食べたり、飲料水のミネラルウォーターを飲む際は、**全面マスクを外さざるを得なかった。**
 - **生きていく（操作&監視）には食べるしかなく、身体の事が心配だった。**
 - 更衣所の窓の外には信じられない光景。**あの防波堤がドミノのようにあっさりと倒れている。門型クレーンは SW ポンプに突き刺さり、流された幾台もの車。真下からは鳴りっぱなしのクラクションが聞こえた。**
 - 揺れの最中から、アドレナリンが大量に出たのか恐怖感はあまりなく、妙に冷静だったような気がする。まるで夢の中の出来事のような……。少なくともこの状態が2Fへ待避するまで続いた。
 - 揺れが徐々に大きくなる中、正面に見えた6号スクラムの赤く光る ANN 窓、「5号機も来るな」と振り返った数秒後に5号機もスクラム信号発信。**火災警報もホコリ**

が原因で多数発生、中操内も薄白くなった。鼻が詰まる、マスクしたい。

- パラメータを確認したりしていると、「ドン」という衝撃音。皆「？」という表情を浮かべていたが、まもなく5号D/Gが全台トリップ。5号中操は非常用の白熱灯だけになってしまった。
- 重油タンクは1つが物揚場の方に流れていくのを見た。その前に、何の船かわからないが、大津波が来る前に、物揚場から黒い船がギリギリ津波をうけないで、出ていった。他の現場のガードマンに聞いたら、怪我人もなく作業員が出たと言っていた。
- いつも見ていた発電所は文字通り「変わり果てた姿」となっていた。爆発した原子炉建屋だけでなく、視界に入るありとあらゆるものが損傷し、夥しいガレキが広範囲に散乱していた。また、海面から10m高さの敷地まで重油タンクが流され道路を塞ぎ、何台もの車がひっくり返っていた。夜間は暗闇で不気味なほど静かだった。
- 真っ先に浮かんだのは「空爆で破壊された跡」という印象で、全面マスクを通して見たためかもしれないが妙に現実感がなく、TVニュースや映画で見ているような感覚だった。数日前までは普通に生の空気を吸って自由に歩き回っていた同じ発電所構内とはなかなか受け入れられなかった。

【復旧作業での声（ベント）】

- ベントにいける人間を募った。比較的若い操作員も手を挙げた。涙が出る思いだった。当直長をそれぞれ割り振るように編成した。完全装備で線量が高い状況もわからない中に行かせるので、若い人は行かせなかった。
- 3組目まで準備したのは、線量、体力や余震で引き戻すことなどを考えてのもの。同時に出発すると緊急避難時の救出ができない恐れがあるため、1チームずつ行くことを指示した。
- 当直長の自分が現場に行きたいと思った。言葉にも出したが、同僚から「お前は最後まで指揮をとれ！」と言われた。頭が下がった。言葉もでなかった。申し訳ない思いでいっぱいだった。
- 同時に出発すると連絡が取れないので、1チームずつ行きましようとなっていた。建屋へは南側の二重扉から入った。すごいモヤがかかっている、なぜこんな状態なんだと思った。通常は乾燥しているイメージ。南側からHCU（注：水圧制御ユニット）の後ろを通って、北西の階段を中地下まで降りた。線量計を持っていてチェックしていたが、トーラス室に入ってすぐにこれはダメだとなって、走って戻った。
- 目標時間は15分、懐中電灯とGMサーベイメータ（注：放射線測定器）を手に中操を出た。酸素消費も抑制しなければならぬため呼吸にも気にしながら。しかし線量も気になるので1号機建屋に入る頃には自然と小走りになっていた。R/B二重扉の前に立ったとき緊張を抑えるように「ヨシ！」と気合いを入れた。

- トーラス室北西の入口扉の前に到着し、サーベイメータをみたら 600（注：単位は mSv）位に上がっていた。トーラス室北西の入口扉は閉まっていた、**扉の向こうがどんな状況になっているかも分からなかった。ここまで来たら行くしかない**と覚悟してドアノブに手をかけてトーラス室内部に突入した。懐中電灯の明かりに照らされたキャットウオークへ続く階段が見えた。ふとサーベイメータをみると 900～1000（最大目盛）（注：単位は mSv）を針が振れていた。**振り切れるまでは何とかなる、との思いで左回りにキャットウオークを進んだ。**
- 北側のトーラスハッチ（90°）に差し掛かった頃、**サーベイメーターがついに振り切れて戻ってこなくなってしまう。あと半周も残っているの**のと思いつつ、いくら線量があるのか分からない状態で危険と判断、**操作をあきらめて引き返すことにした。**会話は出来ないので腕を取って何とかジャスチャーで撤収する旨伝えた。あとは来たルートを遡るように、転ばないように来たときより速く走って戻った。
- 格納容器のベント弁に治具をかませて開けたままにする作業を復旧班が行おうと思ったが、SRV（注：逃がし安全弁）から S/C（注：圧力抑制室）へ蒸気が行く音がすごくて、熱もあり、**トーラスに入れなかった**ということで、操作出来ずに中操に戻ってきた。
- 暗闇で、SRV ポコポコ吹いている、S/C 上部で靴がとけた。
- ●●弁は開確認してくれっていわれて、S/C に行ったら靴が溶けた。目視では確認できなかった。**弁が一番上にあるやつだったので。熱さ確認のため、トーラスに足をかけたらずると溶けた。**やめたほうがいいと判断した。

【復旧作業での声（S/C スプレイ）】

- 現場は、炉注入の●●弁開と、3/13 5:08 の S/C スプレイ弁開と閉操作。**長靴が溶けたのは、D/W スプレイに行って S/P スプレイを止めた時。S/C 弁が熱くて握れなかった。**
- スプレイ弁操作時にちょうど SRV が動作した。**ゴゴゴゴゴ**という音とキャットウオークの振動を体感した時、思わず『●●逃げろ！』と急いでトーラス室外へ避難した。この**蒸気が漏れたら自分は死ぬの**だろうな！と思いながら操作した。
- R/B 内は、SRV 動作の音（ゴゴゴ）がしていた。**トーラス室に入ると、とても暑く、一気に汗が吹き出した。**SRV の動作時には、トーラスも揺れているのが見えた。**「蒸気が吹き出したら無事では戻れないかも」と思った。**
- 手摺りに足を掛け、ウィルキーで操作しても**堅くてなかなか開けられない。2回転ぐらいで息が上がり、交代するのを何度か繰り返した。**「D/W・S/C の圧力上昇を抑えるためにはスプレイは絶対必要なんだ！消火ポンプでどの程度効果があるか分からないけど、今はそれしかない。**誰かがやらなければいけないんだ。**」という思いだった。

【復旧作業での声（注水、SRV・計器復旧、電源復旧）】

（注水）

- 協力企業の社員さんが、社長からは戻るよう言われていたのに、我々**みんなで何とか発電所を守るために一生懸命対応している姿を見て、「私は帰れない」と泣いて残ってくれた**。直接社長に「もう少し残ってから戻る」と言ってくれていた。

（SRV,計器復旧）

- SRV のケーブル切り（注：SRV を開くために必要なバッテリーを接続するケーブルを処理する作業のこと）も大変な作業。ワイヤーストリッパーもない状況で、かなり長い長さのワイヤー端末処理（心線出し）を傷つけないように気をつけながらペンチでやり、10 個直列でバッテリーとつけるために行うのは大変。中操は暗く、難しい。ゴム手でビニールテープでバッテリーに線を付けるときに、ゴム手にべたべたついて大変だった。
- バッテリーもつないでいき、DC の 120V くらいになると、**パチパチで恐ろしい状態**。繋いでいく際には火花が**パチパチの状態**。24V でさえ、手が滑って火花が大きく出て**バッテリーの端子が溶けた**ときもあった。

（電源復旧）

- 余震、津波警報で現場に出られず、免震棟の中では当直から電源復旧に関する情報も来なかったため、**TL（注：チームリーダー）、主任クラスで志願して T/B（注：タービン建屋）や S/B（注：サービス建屋）の現場調査を申し出た**。
- マンホールの蓋が水の力であいていて、月明かりだけで、瓦礫が散乱する中、一步一步開口がないか確認しながら進んだ。
- **通常であればケーブル布設作業は 1・2 ヶ月かかる。数時間でやったのは破格のスピード**だと思う。暗闇の中、布設のための貫通部を見つけたり、端末処理を行ったりする必要もある。高圧ケーブルの端末処理は特殊技能で、丁寧にやる必要がある。それだけで通常は 4～5 時間程度かかる。また、通常なら機械を使ってケーブルを布設するが、今回は人力でやっている。ケーブルは 15cm くらいのケーブルが 3 本集まっているもので、重量がある。
- 一番インパクトがあったのは余震。行っては戻れ、行っては戻れとなった。その度に、安否確認にも時間がかかった。相当大きい余震があり、死に物狂いで走って帰ってきて、すぐにまた向かうわけにもいかず、2 時間程度休んでまた向かうという感じだった。
- **電気品室は水があった。長靴での作業。電気が来ていないとは思っているが、感電の可能性もあり、死ぬかもしれないと思いながらの作業であった**。
- 死と隣合わせの作業だった。慣れない全面マスクを着用しての作業、余震や津波の

度に走って逃げた。この繰り返し。

- P/C（注：低圧電源盤）があるところは堰があって、その中に水がいっぱい溜まっていた。長靴でないと P/C までいけない状態で、**作業をやるにも工具を下に置けない。明かりを照らしたり、道具を持ったりする人が必要だった。**
- みんな地震で**家族がやられている人もいるし、涙を流しながら会社に勤めていた人もいたし、みんな電話が繋がらないから、生きているか死んでいるかも分からない状態だった。**

【爆発時の状況】

（1号機の爆発の時）

- **消防車の窓が爆風で割れて、それからスポンと（瓦礫が）とんできた。**水素ボンベから漏れたと思った。あの辺ガスが充満していたんだと思う。それで**一瞬ゆがんで見えた。そしたらものすごい音で、爆音と共に、中が浮いたみたいな感じになった。**その時に、ロケットのように正面から飛んできた。瓦礫が。
- **なんの前ぶれもなく突然中央制御室全体がごう音とともに縦に揺れた。部屋全体が白いダストにおおわれた。「全面マスク！」**の声で全員マスクを付けた。椅子から落ちた者もいた。
- **ドンと音がして、縦揺れがあって、天井が落ちてきた。**地震かと思った。中操から免震棟に何が起きたか聞いていた。免震棟とのやり取りで、**何が起きているのかわからないので、若い人は免震棟に避難**することになった。当直は主任以上が残った。20名くらい避難した。自分が**先頭で線量を測りながら、走って避難**した。S/B（注：サービス建屋）から出て、2号機と3号機の間ゲートを通って避難した。途中で1号の鉄筋が見えた。ICW（注：放射線測定器）で**10mSv くらいはあった。**
- この先どうなるんだろうと途方にくれる中、**突然「ドガーン」とものすごい音と共に天井のルーバーが外れ中ぶらりとなり直感的に「あっ、格納容器が爆発した」、さらに「死」も頭をよぎった。**誰かがとっさに線量計をかざし指示値を確認していたが大きな変動がなく「あれ上がっていない」「大丈夫かな」「中操の天井はそんなに頑丈に出来てないよな」「早く非常扉を閉めて養生し外気が入らないように」など瞬時なにおきたのか分からなかった。後になり免震棟とのホットラインは健全でどうやら R/B が爆発したらしいとの情報が入った。
- 1号側の逆洗弁ピットの脇にいた。あまりの衝撃でびっくりした。**空を見上げたら、瓦礫が空一面に広がっていて、バラバラ降ってきて、二人で逃げた。**瓦礫にあたっていたかもしれない。二人で走って逃げて、あまりに瓦礫が降ってくるので、もう一人の人を突き飛ばして、タービン建屋脇にあるタンクの壁際に沿って瓦礫をよけるような行動を取った。少したってから、**逃げようとしたら、もう一人がトラックの脇で立てなくなっていたので、二人で戻って抱えて歩いて逃げた。**ひたすら無線

で爆発だと叫んで歩いて戻った。

- 1号爆発の時は免震棟入口のそばにいたが、中に入れず、逃げ回った。近くにあった消防車の中に逃げ込んだ。
- 免震棟が**一気に縦にガンと揺れた**。免震棟のデスクのところに座っていた。免震棟の天井を横切るような形でシャッターがあって、余震がある度に、**シャッターがいつ落ちてきてもおかしくない**ので、**その下にはいないように**して、常に揺れがある度に上を気にしていた。特に1号の時は縦に**ドンと強い衝撃があったので、そこが一番恐かった**。
- 戻って**免震棟の前で爆発した**。免震棟の中に入れなくて、みんなバラバラに逃げた。自動ドアが曲がってしまった。その後自動ドアが直って入れた。
- 1階の入口にいた。爆発した瞬間飛ばされて、**免震棟の内扉が爆風でズレて、二重扉が機能出来ない**ので、ボールをもってきてもらって、レールに戻して開閉できるようにした。その時は、上から白いものが降ってきた。
- **防火扉が閉まっていたが、爆風で開いて、天井が下がって閉まらなくなった**。2階にいて、中が汚染するのが目に見えていたので、棒で天井を上げて、防火扉をふさいだ。1階も同じだったようだ。近くにいた人が手伝ってくれた。

(3号機爆発の時)

- 風圧はなかったが、風船をバンとやってみたいな音だった。**一瞬で真っ白になって、しばらくしてガラガラと音がしたのでコンクリートが降ってきたと思った**。アーケードが津波で倒れていたがそこに隠れようとした。でも空が見えていてダメだった。**すぐそばにあった配管が、上からは丸見えだったが、その陰にぺたっと体をつけて隠れた。死ぬかと思った**。バンとなって真っ白になって、見えるようになるまで待っていた。2号と3号の間を行ったが瓦礫の山だったので。車は動かせない状態だったので、瓦礫の上をみんなで歩いた。2,3号機間が瓦礫がすごかった。
- 1号機水素爆発後にケーブルを引きなおしたが、3号機で水素爆発が起こった。メンバーは走って緊対室に戻ってきた。作業員はパニックだった。
- 3号の爆発の時は2号機の松の廊下にいた。**すさまじい爆発音とともに、埃が舞って真っ白になった**。乗ってきた協力企業の車が吹っ飛んでいたのも、本当に恐怖だった。
- 2号タービン大物搬入口にいた。ケーブル引きをやっていた。**ドンと音がして揺れた。爆発だと思った**。状況を確認するために搬入口の外に出て、煙を測ったら**線量が50mSvくらいと高かった**ので、煙がなくなってから避難することにした。1号側のゲートは通れないことが分かっていたので、2号機と3号機の間をゲートを通って逃げた。2号と3号の間は**爆発の瓦礫があって、瓦礫をよけながら走って逃げた**。線量は100mSvのところもあった。自衛隊の人や、他の人もいた。全員避難

したことを確認した。

- 3, 4 号中操にてデータ採取中, 3 号機爆発。**凄い揺れに「中操が崩れる, もう終わりだ」と思った。**凄い恐怖感に襲われた。**中操内の線量が上昇したため, 低いところを探して 4 号中操の裏に待避**していた。交代のメンバーが来れず, 全面マスク着用にも限界を感じていた頃, 交代が来た。「ありがたかった」「早く免震棟へ戻りたい」気持ちで一杯だった。
- 11:00 頃中操データ採取後に本部に電話報告しようとしたところ, **すさまじい衝撃音。廻りがダストで見えなくなった。**しばらく放心状態だったが, 一緒にいた仲間の安否確認を実施し本部に報告。3 号機爆発の知らせを受けた。交代は来ないだろうと思い**長期被ばくによる死を覚悟した。**夕方交代要員が来てくれたがうれしくもあり心苦しさもあった。

(2 号 S/C 圧力 0 の時)

- 0 時くらいに人を募って中操に入った。パネルの前とか副長席の前に座っていた。**定期的にポコポコ, ポコポコという音がして, 何かあるなと話していた。朝方ドーンと音がして, 後ろで計器を確認していて, AM 盤だと思うが, S/C 落ちたという話があって, この異音は何か,**ということで当直長に報告するに至った。
- 1 号の時とは違った。**1 号のような衝撃ではない。ズンという感覚。抑制室なんかは思っていない**(注: S/C で異音がしたとは思っていない, という意味)。S/C 圧力 0 は読み取りデータで確認してもらったので事実。そんなに大きな音ではない。中操では音が聞こえた。それが何かはわからない。振動は大きく無かったと思う。

(4 号機爆発の時)

- S/B に入ったら後ろで**衝撃があった。音はよく覚えてない。風圧みたいな感じだった。**で, 中操に行って話しを聞いた。車に 6 名全員乗って帰ろうとしたが, がれきの山だった。集中 R/W 側を通過して帰ったらどんどん進めなくなりひどい状態だった。その時 4 号がやられているのを見た。**がれきで進めないの**で, 4 号 R/B の山側から**車を乗り捨てて走って逃げた。**車を置きっぱなしで, もう走れないので, 7 番ゲートから出た。

【オフサイトセンター対応での声】

- オフサイトセンターの機能は 12 日未明に回復し, オフサイトセンターが使えるそうだ, という話が来た。**とても寒い冬空の下, コートもなく作業着で長い時間待っていた。身体の芯まで冷える感じだった。**
- **水や食料品, 生活用品などあつという間に底をつきそうな状況**であった。当社のメンバーを買出しに出したが, **いわきまで行っても物が手に入らず, とても苦勞し,**

一日かけて買えるものを一生懸命集めてきてくれた。

- 1号機が爆発したあと、発電所で精神的にもダメージを受けた人たちが一時的にオフサイトセンターに避難してきた。**みな顔面が蒼白で、言葉もなく、中には震えている人、泣き出す女性もいた。**かなりの恐怖の中でみんな頑張ってくれていたのだ、と改めて感じた。
- わずかな二重扉の空間を利用して、着替え、サーベイ、除染を行う。当社から来ている放射線班のメンバーは、**まったく休む暇もなく、とにかくよく頑張ってくれた。汚染の除去も水しかなく（本来はお湯が必要）、とても苦労していた。**作業員の数も増え、自転車操業の状況であったが、**追加の要員の手配もままならず、同じクルーでずっと対応していた。**
- 県庁に移動するか、現場に戻るか、ものすごく悩んだ。そんな時、やはりオフサイトセンターと一緒に来ていた5、6号機を担当しているベテランの運転員から、「私は何でもやります。**私は発電所に突っ込む覚悟です。何かやらなければいけないことがあるば、遠慮しないで言ってください。最後は運転員の意地を見せたいんだ**」といわれた。（注：放射線量の上昇によりオフサイトセンターを県庁に移転することになった。本来なら県庁に移動しオフサイトセンターの要員として対応する必要があるが、発電所に戻り事故復旧の対応にあたった）

【非番・休暇等の社員の状況】

- 日が落ちて暗くなり停電で何も出来ない中、**外出中の娘の安否を確認する間もなく、女房に後を託して18時過ぎ、歩いて会社に向かった。**途中、GSでガソリンを入れる車列6号線は大渋滞していた。すでに道を歩いているような人はなく、自分自身何も情報は持ち合わせていないまま黙々と歩いた。
- 1日目の夜勤が明けて独身寮で休んでいたところ地震がおきた。地震から幾分かすると町の役場から津波警報が発令されたこと、国道より山側に避難するよう放送があった。**後輩や、寮の人達と共に双葉病院に一時避難した。後輩は高熱を出していたが病院の人に任せ自分の勤務が夜勤だったこともあり18時頃夜勤バスは来ないものと判断し、自分の車で通れる道を探しながら出社した。**
- 北小学校内1階は避難者でいっぱい、2階の一室にて近所の方と10名程度ですわって待機していた。寒いので一度実家へ帰り毛布を5枚程度持ってきてお年寄りに渡した。実家では真っ暗だったためライトを持っていて正解だった。少しおちつくと、10条ないし15条通報が聞こえた。同僚と一緒に避難していたため、これはやばいと思い二人で会社に行くことを決めた。**妻は病院でけが人の対応に追われているようではなかなか連絡が取れなかったが1度だけ電話が繋がりに、家族は無事でこれから会社に行く」と伝えた。**
- 地震発生時、夜勤中日だったため、自宅で寝ていた。外に出ると町の防災無線がな

り消防団の緊急招集の放送が流れた。自分は町の消防団に所属していたので役場に急行した。消防車にて道路の状況をパトロールし役場に報告した。津波に関しては、消防車で警戒の放送をしていたが、役場に一時戻った際に第一波が到達したと聞き海岸沿いに急行したが近づけない状況だった。その後、総合スポーツセンターへの避難誘導を行いながら、アパートや民家の火災有無、ガスボンベや水道管が破裂している箇所の調査、元弁の閉操作などを行った。その後 19 時 30 分頃に同僚と一緒に消防団員に消防自動車が発電所の正門まで送ってもらった。

- 15 時 30 分頃自宅を出て、双葉中学校グラウンドで隣組の避難状況を確認。自宅に居た方は避難完了していた。隣組の人に「私は会社に行く」と伝えて出社。途中、独身寮に立ち寄り、他の社員 4 名と共に徒歩にて発電所に向かい、18 時 30 分頃中操に到着。
- 避難所で 1～2 時間ほどすごしたあとで自分は会社に手助けに行こうと思ひ同僚に伝えアパートに戻り車で会社へ向かった。発電所構内でやっと実家と電話がつながり話をする事が出来た。両親に発電所事故対応に向かうことを伝えると、以前原発での作業経験がある父が一言「気をつけて行ってこい。」と言った。自分のなかではこの時点である程度の覚悟を決めていたような気がする。
- 3/12、朝早くに役場職員より「発電所が危険な状態です。国道 288 号でとりあえず郡山を目標に山に逃げて下さい。バスは用意しますが、全員は乗れません。自分の車で避難して下さい。」とアナウンスがあり旧都路村の親戚宅に実家と姉家族と避難をしました。途中の国道 288 号は大渋滞でした。お昼過ぎに父が薬を取りに大熊に戻るといので、同乗して発電所を目指しました。途中、消防団で検問をしておりましたが、なんとか戻ることが出来ました。親は薬を持って引き返し、私は実家に置いてある車で発電所に出動しました。
- 12 日に避難しろということで、避難し始めたんですけど、やっぱりどうしても俺、会社が心配だからと言って、途中で降りて歩いて戻った。シャットダウンを入れるのを手伝いに行ってくるから位に家族に言って。家まで歩いて、車に乗って発電所に向かった。それが行ったら、えっ、何これ、何をやっているの、と。まず正門で全面マスクの人が対応してくれて、何でこの人達はマスクをかぶっているんだろうという状態。

【家族との連絡状況】

- 3/15、この頃、家族によろやく電話がつながるようになり「特に必要な人員 50 人位を除いて 2F に避難している。」と報道されていると知り、「1F に残っている」と伝えると非常に驚いた様子でした。3/22、地震後初めて発電所から退構して家族が避難している実家に向かいました。
- 3/16 の昼頃にやっと川内村の避難所に避難していた妻と連絡がとれ、無事に茨城

県の実家について確認できた。

- 私が**避難先の家族のもとへ合流したのは、震災から16日後の3/27**でした。
- このころ（3/17頃）、誰からか、会社PHSで本店経由し外線通話できると教えられ、ようやくメンバーの安否確認を始めた（まだ、携帯は繋がらない）。もちろん最初は自宅へ連絡、ようやく避難していた家族と連絡が取れた。**涙声の嫁の声を聞く、爆発で死んだと思っていたとのこと。連絡できなかったから無理もなかった。**

以 上